

## 国語

五まいのうち、その一

(注意1) 解答は、すべて、解答らんに記入しなさい。

(注意2) や、や「や」や(や)やーは一字と数えます。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たち百姓が主体となった NPO (非営利団体)「農と自然の研究所」は、どうしても田んぼの生きものの全種リストを完成させたいと考えました。そのためには、多くの研究者の協力が必要ですが、私たちの研究所は小さな NPO でそんなに予算はありません。それに私は百姓であって、研究者でもありません。そこで私の先生である桐谷圭治きりたにけいじさんにリーダーをお願いして、協力してくれる友人の研究者たちに声をかけました。すると、七二名の協力が集まり、日本ではじめての「田んぼの生きもの全種リスト(一らん表)」ができあがったのです。

最終的には五六〇〇種あまりが「田んぼの生きもの」としてリストアップされました。

私は「鯉」は田んぼの生きものではないと思いきや、毎年田んぼの横の水路までさかのぼってくる村があると聞いて、その村の百姓のまなざしを尊重して、田んぼの生きものに加えました。ここで言う田んぼとは、田んぼの中心だけでなく、田んぼを支えているあぜ(田のまわりに土を盛り上げて境としたもの)やあぜ道、田んぼに欠かせない水を運ぶ水路や池もふくんでいます。これらの場所で生きている生きものですから、ずっとそこにいる生きものもいれば、ときどきエサを食べにくる生きものもいます。

ずっといるのは、そこで生まれる生きものたちが主で、カエルやトンボ、イトミミズやトビムシ、タニシやカブトエビなどです。ときどき来るのが、ツバメやスズメやガンやコウノトリやシラサギなどの鳥類やヘビやタヌキや人間などです。私はこのリストにのっているすべてのページの生きものの名前を読んできました。とちゅう、まったく知っている生きものがないページがつづくと、少しねむくなりましたが、一週間ほどかけて、ちゃんと知っている生きものに印をつけてみました。約七〇〇種でした。昔の百姓は六〇〇種ぐらいの生きもの名前を呼んでいたらいいのですが、私のほうが多いと思われると思います。私は、ただ名前と実物ががっちりするだけで、その生きものとのつきあいは、浅いものばかりです。

この「リスト」にのっている生きものの全種を知っている人間は、この世界には一人もいないことは断言してもいいでしょう。それにもかかわらず、①このリストには何の意味があるのでしょうか。

私は、これは外からの、科学的な方法による「世界にん識」だと思えます。「世界にん識」なんて、難しい言葉ですが、子どもが「いったいぜんたい、田んぼにはどれぐらいの生きものがあるのかなあ。」と思いをふくらませることと同じことです。「田んぼって、どんな世界なんだろう。」と想像することが世界にん識ならば、それに答える一つの方法がこの「リスト」なのです。

②私は、このリストのページをくりながら、深い思いにとらわれました。こんなに多くの生きものが生きている世界が身近にあるどころか、私が働き、生きている職場なのです。百姓は、すごい世界で生きているのです。そして、いくら生きものの調査をしても、自分の田んぼだけではこのうちの一〇パーセントの生きものにも会うことはないのです。私たち百姓に知られることもなく、生をくりかえしている生きものがいるのです。その生のくりかえしに、私たちの百姓仕事役立っているのです。ありがたいことだと思います。

江戸時代まで日本語の「自然」には、自然にそうなるという意味しかありませんでした。自然かん境という意味はまったくふくまれていなかったのです。これは英語の nature (ネイチャー) のほんやく語として、新たに付け加えられた意味なのです。③しかし、どうしてこんなに自然がいっぱいなの。に、「自然」という言葉がなかったのでしょうか。江戸時代までは、自然はどう呼ばれていたのでしょうか。

私たちが「自然」と口に出すときには、その自然に自分(人間)はふくまれていませんね。人間以外を自然と言うのです。つまり自然と言うときには私たちは、自然の外に出て、外から自然を見ているのです。それに対して、江戸時代までの日本人は、自然の中に生きていて、自然と自分(人間)を分けませんでした。これを池のフナにたとえてみると、よくわかるでしょう。池の中に住んでいるフナには、池の中のことはすみずみまで分かっていますが、池の外形は見えません。ところが、あるとき池の岸に登ってしまったフナには、はじめ自分が住んでいる池の全体像が見えたのです。「そうか、こんな丸い池に住んでいたのか。」というような感じでした。

この池を、「自然」という言葉に置きかえてみてください。池の中のフナは、ほかの魚や生きもの、水草や水そのものの名はよく呼んでいたでしょうが、池という言葉を使うことはなかったでしょう。自然と一体になることは、私たちたちが④ヨウイだったのです。一方、現代の日本人は、自然を外からながめることに慣れてしまいました。人間と自然とのあいだにかきねができてしまったと言ってもいいでしょう。

④さて、輸入語としての「自然」はもう一つの性格をもっていました。それは、人間以外を自然と言うことになると、人間からいちばん遠い、人間のえいきょうを受けていない自然がもっとも自然らしい自然ということになるのです。現実

に自然の中でいちばん価値があるのは、人為(人間の行為)がおよんでいない「原生自然」だという常識が定着しています。世界自然遺産のほとんどが、原生自然がそれに近い状態の場所です。なぜ、人為が加わった自然は価値が落ちるのでしょうか。そのへんの田んぼが貴重な自然だという意識は、ほとんどありません。

西洋では原生自然は、神が創造したままの自然が残っている

るので、神の意志にふれることができるから価値があるのだ  
 そうです。それは一つの考え方として、㉔スジが通っている  
 とは思いますが、日本の伝統的な世界観では受け入れにくい  
 考え方です。そこで、人為によって乱されていない「自然な」  
 状態だからという日本の文化に寄りそうような説得がおこな  
 われています。

日本人が「自然」という言葉が好きなのは、「自然にそう  
 なる」という意味が、㉕ままならぬ人間の生き方の手本とさ  
 れてきたからでしょう。このように私たちが使用するようにな  
 った「自然」という言葉は、「自然に、自然な、自然のまま  
 に」という伝統的な日本語の意味が合流しているからこそ、  
 み力的なのです。しかし、㉖ここに大きな問題がかくされて  
 いるのです。

自然との関係で考えるとき、農業は自然破かいなのか、そ  
 うではないのかを少しつきつめておく必要があると思います。  
 ㉗「農業は自然破かいなのだろうか。」という問いには、  
 三つの答え方があります。

まず、人間の手の入っていない原生自然を理想的な自然だ  
 とすると、農業は自然に手を入れるので、明らかな自然破か  
 いです。このように自然と人間を対立するものだと考えるの  
 は、西洋で生まれた考え方ですから、しかたがないでしょう。  
 前に述べたように、もともと「自然」(英語では nature)と  
 は、人間以外をさす言葉として、西洋で生まれたものです。  
 そこで、自然とは人間つまり人為をもふくむものだと考え  
 るなら、田植えの結果として田んぼで生まれる赤トンボはも  
 とより田んぼ自体も自然の代表選手になり、農業はむしろ自  
 然を支えるものだとということになります。

しかし、その人為の程度が問われはじめたのは、農業や化  
 学肥料が使われはじめた一九五〇年代からです。したがって  
 現代では、もう一つの答え方をするしかなくなってしまう  
 した。農業はやり方によっては自然破かいであり、やり方に  
 よっては自然保全的だ、と答えるしかありません。とくに、  
 現代の農業は生産効率を上げること(これを近代化と呼びま  
 す)ばかり求められているので、自然破かい的にならざるを  
 えなくなっています。

したがって、農薬を減らした農業や化学肥料を使用しない  
 有機農業などが、それを解決する手段として登場してしまし  
 た。㉘重要なことは、なぜ農業は近代化すると自然かん境を  
 ぎせいにせざるをえないかということです。けっして農業や  
 化学肥料などを使用するからだけでなく、もっと深い原因が  
 あるのです。

たとえば、農薬や化学肥料を使用しない有機農業であつて  
 も、生産効率を求められています。手植えで田植えするのは、  
 時間がかかるので、ほとんどの百姓が田植機で田植えしてい  
 ます。以前は、田んぼに水を入れ、その一画を利用してなえ  
 を育てましたが、田植機で植えるなえは陸上の箱の中で育て  
 ます。その結果、田んぼの一画で卵を産んでいたトノサマガ  
 エルは、産み場所がなくなってしまうのです。

このように、機械化によって、百姓仕事が変化すると生き

ものはえいきょうを受けます。これも自然破かいだと言える  
 でしょう。また田植機と、いねを収かくするコンバインのふ  
 きゅうによって、サンカメイチュウという害虫は絶めつしま  
 した。田植機で植えるなえは小さいので、幼虫が育ちにくく、  
 またコンバインでいねを細かく切断するので、幼虫が死んで  
 しまうのです。害虫がいなくなればいいではないかと思うか  
 もしれませんが、サンカメイチュウの天敵たちも絶めつして  
 いきました。これも自然破かいの一例です。

また近代化は、労働時間の短縮を目標にかかげるものです。  
 ㉙ジンケンヒが安くすむからです。私はこれが、近代化によ  
 って自然が破かいされる大きな原因だと考えています。百姓  
 仕事が楽しければ、かかる時間が長くてもいいではありません  
 んか。

友人の親子の話です。むすこがこう言います。「お父さん、  
 朝も昼も、田んぼのいねを見に行つたらう。また夕方行く必  
 要はないだろう。何の変化もないよ。」父親はこう言い返し  
 ていました。「変化はないかもしれないが、いねの顔を見て  
 おきたいんだ。おまえだって、夕食のときに見ているのに、  
 ねるときには、またむすめの顔を見てねどこにつくではない  
 か。」むすこはそれでは引き下がりません。「農業は子育てと  
 はちがうよ。産業としてさらに効率を上げるように国民から  
 求められているんだ。」

一九六〇(昭和三五)年には、一〇アール(一〇〇〇平方  
 メートル)あたりの労働時間は一九三時間でしたが、現在で  
 は三〇時間を切っています。機械化され、労働時間が減った  
 ということもありませんが、田んぼやいねと向きあう時間をぎ  
 せいにせざるをえなくなったのです。いねを A ので  
 はなく、B ようになってきたのです。

私の経験です。その日はほかの仕事がいそがしくて、夕方  
 に田んぼを見に行きませんでした。翌朝田んぼに行くと、田  
 んぼが干上がっていました。あぜにモグラの穴が開いて、水  
 もれして、下の田んぼまで水が行かなくなっていたのです。  
 その田んぼのオタマジヤクシは死んでいました。もし私が夕  
 方に行っていたなら、気づいて、オタマジヤクシも死なずに  
 すんだでしょう。こうしたことが積み重なって、生きものに  
 大きな変化が生じてきています。

多くの都道府県で「絶めつ危ぐ種」を発表しているので、  
 調べてみてください。そのうち、田んぼや水路やため池の動  
 植物が、約三割をしめています。これは農薬のせいもありま  
 すが、それだけではありません。生産性を上げたために、多  
 くの生きものが生きにくい田んぼになってきているのです。

もう一度、農業が自然破かいかどうかを考えてみましょう。  
 私たちはいつのまにか、「自然」と言うときには人間をふくめ  
 ています。人間は自然ではないと思ひこんでいます。それは  
 明治時代以降、西洋からもちこまれた、日本人にとっては  
 新しい輸入語で、しかも輸入思想であったことは、すでに説  
 明しました。この結果、人間の行為も完全に自然ではない

## 国語

ことになりました。百姓仕事も人為ですから、自然に対する破かいだという考え方も生まれました。

そうすると、説明できないことがいっぱい生じてきます。田んぼは人為で開かれて、㉔ゾウセイイされたところですから、自然ではないということになります。しかし、その田んぼで、身近な生きものの多くが生まれ育っていることは、「田んぼの生きもの全種リスト」でも明らかです。

これらの生きものは、自然の生きものではないのでしょうか。「たまたま、しかたがなく自然の生きものが、人工的な田んぼの中に移住しているだけだ。」という言い分を認めることにしましょう。それなら、その状態が二〇〇〇年以上もつづいてきても、あくまでも人工的な場所に自然の生きものが仮住まいしていると言ひ張らなければならぬのですか、と質問したくなります。さすがにこれには答えられないでしょう。そこで「田んぼも自然の中に入れてやってもいいけれど、人為が加わって、本来の自然を失った二次的な自然だということにしましょう。」と提案されています。

しかし、これにも私はなっとくできないので、反論しています。百姓の手入れがおこなわれている自然（二次的自然）と、人為が加わらないままの原生自然を、なぜ区別しないといけないのでしょうか。なぜなら、私の村には原生自然などまったくないし、私は一生のうちたぶん一度もそういう原生自然にふれることはないでしょう。そうなると私は、ほんとうの自然（原生自然）を知らないまま、自然について話したり、自然は大事にして守らないといけないと主張したりしていることになりました。つまり、私が念頭にいつもうかべている自然とは、せまい、小さな、局部的なものなのでしょうか。そうではないと思います。

つまり、私は自然を村の内側から見ています。自然の一員として、人間と自然を分りせずに見ています。それに対して、

自然の外から見るから、原生自然と二次的な自然の区別もできるのです。私たちが話題にしている自然とは、ほとんどが **C** から見ると二次的な自然ですが、それは **D** から見ると自然そのものです。わざわざ二次的な自然と断る理由は原生自然を理想的なモデルにしたいという思いが外側からの見方にあるからでしょう。㉕百姓はこれが受け入れられないのです。

赤トンボを例にして説明しましょう。日本で育っている赤トンボは多めに見積ると、約二〇億ひきです。問題はそのうち、田んぼで生まれているのが九九パーセントだということです。赤トンボは、西日本ではウスバキトンボという種類が主ですし、東日本ではアキアカネが主です。言いたいことは単純明快です。赤トンボに関しては、百姓仕事という人為こそが、赤トンボという自然を支えているのです。㉖人間（人為）と赤トンボ（自然）は分りできません。

百姓仕事という人為によって生まれ、つづいている田んぼという世界は、十分に自然です。なぜなら、現代社会にとつてもっとも重要な自然は、人間のかかわりがふだんに問われ、ふだんに見直され、格段の努力を注がなければ守れない世界がほとんどだからです。田んぼという自然も守れなければ、原生自然も守れないでしょう。田んぼは少なくとも日本では最大の自然です。人為である百姓仕事を引きつづきおこなわれており、その成果がもっとも見えやすい世界としては、森林の比ではありません。そういう意味で、日本最大の身近な自然なのです。

人間との関係によって変化する自然だからこそ、私たち人間の役割を自覚して暮らすことが、新しい自然のとらえ方です。 (宇根 豊の文章による)

(1) 線①「このリストには何の意味があるのでしょうか。」とありますが、このリストの意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人々に自然破かいの現状について警告することができるという意味。

イ 田んぼの生きものをすべて知っている人間はいないことがわかるという意味。

ウ 田んぼは多くの生きものが生きている豊かな世界であることがわかるという意味。

エ 今よりも昔の人の方が田んぼの生きものについて多く知っていたことを示すことができるという意味。

(2) 線②「私は、このリストのページをくりながら、深い思いにとらわれました。」とありますが「深い思い」とは、どのような思いですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 田んぼでの百姓仕事が多くの子の生かえしにかかわる豊かな仕事であることがわかったという喜び。

イ 多くの生きものについての知識が田んぼで百姓仕事をするなかで自分に備わっていたことが確かめられたという喜び。

ウ 田んぼでは、百姓仕事だけでなく多くの生きもの働きによって収かくをあげられていることへの感謝。

エ 小さな研究所でも、多くの協力者によって「田んぼの生きもの全種リスト」を完成させることができたことへの感謝。

(3) 線③「しかし、どうしてこんなに自然がいっぱいの国なのに、『自然』という言葉がなかったのでしょうか。」とあります。

1 『自然』という言葉がなかった」とはどういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 江戸時代までの日本語に「自然」という言葉そのものがなかったということ。

イ 江戸時代までの日本語に「自然」という言葉はあったが、その言葉に自然かん境という意味がなかったということ。

ウ 江戸時代までは、自然かん境を「自然」という言葉で表現せずに「かん境」という言葉で表現していたということ。

エ 江戸時代までの日本語に「自然」という言葉はあったが、その言葉に自然にそうなるという意味がなかったということ。

2 『自然』という言葉がなかった」のはなぜですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 江戸時代までの日本人は自然の中に生きていて人間と自然とを区別する意識がなかったから。
- イ 江戸時代までの日本人は人間のかかわりがないありのままの状態を自然だと考えていたから。
- ウ 江戸時代までの日本人は百姓仕事に手間がかかり、自然かん境に目を向けるゆとりがなかったから。
- エ 江戸時代までの日本人は豊かな自然に取り巻かれており、その大きさを言葉で表現することができなかったから。

(4) 線④「さて、輸入語としての『自然』はもう一つの性格をもっていました。」とありますが、「輸入語としての『自然』にはどのような性格があったのですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 人間と自然を一体のものと考え、人間の手の加わった自然がもつとも価値のある自然だとする性格。
- イ 人間と自然を一体のものと考え、人間は自然のリズムに合わせて生活することが大切だとする性格。
- ウ 人間と自然を明確に分けて考えるが、ともに神の意志にふれることができる尊いものだとする性格。
- エ 人間と自然を明確に分けて考え、人間のかかわっていないものももつとも自然らしい自然だとする性格。

(5) 線⑤「ままならぬ」とありますが、これはどういう意味ですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 自然にそうなる
- イ 先を見通すことができる
- ウ 思い通りにならない
- エ 一人では生きていけない

(6) 線⑥「ここに大きな問題がかくされているのです。」とありますが、「ここ」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 私たちが西洋から輸入された「自然」という言葉の意味を受け入れず、「自然」という言葉を日本の伝統的な意味のまま使っていること。

イ 日本の伝統的な「自然」という言葉の意味とのちがいを整理しないまま、私たちが西洋から輸入された「自然」という言葉を好んで使っていること。

ウ 私たちが西洋から輸入された意味の「自然」という言葉を多く用いるようになったことで、日本の伝統的な意味の「自然」という言葉を用いなくなってしまったこと。

エ 日本の伝統的な「自然」という言葉の意味に、西洋から輸入された「自然」という言葉の意味が合流することで、「自然」という言葉の正確な意味が私たちにはわからなくなったこと。

(7) 線⑦「農業は自然破かいなのだろうか。」という問いとありますが、この問いに対する筆者の考えを説明した次の文章の 1 から 3 にあてはまる言葉を、それぞれ本文中から八字以上一〇字以内で書きぬいて答えなさい。

自然と人間との関係で考えたとき、自然と人間を明確に分ける考えでは、農業は 1 だということになる。一方

で自然と人間を一体のものとする考えでは、農業は 2 ものだということになる。しかし、 3 ことが求め

られる現代では、農業は自然破かい的にならざるをえない。

(8) 線⑧「重要なことは、なぜ農業は近代化すると自然かん境をぎせいにせざるをえないかということです。」とありますが、近代化した農業が自然かん境をぎせいにしている原因として当てはまらないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 農業用地の拡大
- イ 農薬や化学肥料の使用
- ウ 作業の機械化
- エ 労働時間の短縮

(9) A B に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア A おいしい食べものとして見る B たんなる研究の対象として見る
- イ A たんなる研究の対象として見る B おいしい食べものとして見る
- ウ A 生産性を上げる対象として見る B わが子のように感じる
- エ A わが子のように感じる B 生産性を上げる対象として見る

(10) C D に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア C 人間 D 自然
  - イ C 日本 D 西洋
  - ウ C 全体 D 部分
  - エ C 外側 D 内側
- (11) 線⑨「百姓はこれが受け入れられないのです。」とありますが、何が受け入れられないのですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 田んぼは人の手が加わっていない原生自然だとする考え方。
- イ 田んぼは人の手が加わった二次的な自然であるという考え方。
- ウ 田んぼは人の手が加わることで自然保護が行われているとする考え方。
- エ 原生自然を知らなくても田んぼの生きものを守ることができるという考え方。

(12) 線⑩「人間(人為)と赤トンボ(自然)は分りできません。」とありますが、これはどういうことを言っているのですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

受 検 番 号

ア 人間の行為によって作られた田んぼというかん境は二次的な自然なのだから、そこで生まれた赤トンボも二次的な自然としなければならないということ。  
 イ 百姓仕事という人間の行為の加わった田んぼで多くの赤トンボを育てたのだから、自然の生きものである赤トンボも人為にふくめなければならないということ。  
 ウ 自然の生きものである赤トンボのほとんどが田んぼで生まれ、その田んぼというかん境は人間の行為なくしては保たれないので、人間の行為と自然とを切りはなして考えることはできないということ。  
 エ 田んぼで働いている人々によって種類や生息数が報告されたことで、人間が自然の生きものである赤トンボに気づくことができたのだから、人間と赤トンボは切りはなして考えることができないということ。

(13) この文章の内容に合っているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。  
 ア 田んぼへの人間のかかわり方は自然破かいするものだと考えられてきたが、現在では自然を守る働きがあることもわかってきた。したがって、田んぼだけでなく、手つかずの自然についても人間は積極的にかかわる必要がある。

イ 田んぼという自然は効率を求めない百姓仕事で保たれる。手つかずの自然だけに価値を認めるのではなく、人間がかかわることによって保たれている身近な田んぼという自然に目を向け、人間と自然とのかかわり方を考えていく必要がある。

ウ 田んぼは多くの人間がかかわることではじめて生きものの生のくりかえしが保たれる世界である。手つかずの自然を守っていく活動も一人ではできないのだから、私たちは人々と協力することの大切さを自覚して、自然保護運動にたずさわることが重要である。

エ 田んぼは自然のかん境であるが人の手も加わっており、そこでは人為と自然とを分けて考えることができない。しかし、人の手が加わった自然はもはや自然ととらえることができないので、私たちは「自然」という言葉についての今までの考え方を改めて、新しい言葉を作らなければならない。

(14) 線①「ヨウイ」、②「スジ」③「ジンケンヒ」④「ゾウセイ」を漢字に直しなさい。

解答らん

(1)	<input type="text"/>
(2)	<input type="text"/>
(3)	1
	<input type="text"/>
	2
	<input type="text"/>
(4)	<input type="text"/>
(5)	<input type="text"/>
(6)	<input type="text"/>

(7)	1
	<input type="text"/>
	<input type="text"/>
	<input type="text"/>
	<input type="text"/>
	<input type="text"/>
	<input type="text"/>
	<input type="text"/>
	<input type="text"/>
	<input type="text"/>

2
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>

3
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>
<input type="text"/>

(8)	<input type="text"/>
(9)	<input type="text"/>
(10)	<input type="text"/>
(11)	<input type="text"/>
(12)	<input type="text"/>
(13)	<input type="text"/>

(14)	① <input type="text"/>
	② <input type="text"/>
	③ <input type="text"/>
	④ <input type="text"/>